読売歌壇

小池　光　選

ラジオから吉幾三の「津軽平野」　皿洗ひつつ不覚にも泣く　仙台市　加藤　祐子

【評】演歌というと軽く考えている人が多いだろうが、そうとは限らない。あるときこころの琴線に触れて、思わずなみだを零すことがある。まさしく不覚、しかしそれが真実だ。

放たれる牛のごとくに退院のバーコード付き腕輪に鋏　仙台市　福島ひろ子

【評】退院の喜び、解放感は入院した人なら誰でも知る。バーコード付き手首のリングを切ってもらって、解放された牛のようにうれしい。この大胆な比喩が、生きている。

「矢切の渡し」あまたの歌手が歌えどもちあきなおみにまさる者なし　東久留米市　郷間　浩明

【評】作者の意見に同意、同感。ちあきなおみは、美空ひばりより歌がうまいと言った人がいる。突如歌手をやめて幾十年。惜しい。

ぽんぽんと石段たたき一歳児横に座れと婆を促す　丸亀市　市橋　康子

手のとどくところの糸瓜にそっと寄り両手でさはるひとりの子ども　仙台市　三角　清造

投稿の歌を猫らに聞かせれば厳しい顔で我を見詰める　いわき市　佐川　義成

ネーミング「一〇〇歳大学」に魅せられて米寿の友と女学生になる　君津市　菅又　久子

ギターだき夜明けは近いときけんでた西口地下のひとつの季節　東京都　青木　公正

物体と化して狸はうずくまる滝野霊園近くの山道　札幌市　三浦公佐子

なつかしきバイトの先輩思い出す帰りに安い芋を買ったね　鳴門市　楠井　花乃

栗木　京子　選

マスクより顔外しつつ語る医師待ちし私を先ず労いて　周南市　野村　貞江

【評】顔からマスクを外すのでなく、マスクから顔を出現させる感じだったのだろう。お待たせしました、と語りかける医師。それだけで体調が良くなる。丁寧に詠まれた一首。

ハッピ着てハチマキしめて横笛吹く紅一点の孫夏終る　前橋市　五十嵐十一

【評】祭りで横笛を担当した孫。しかもメンバーの中で女子はただ一人。きりりとした姿はひときわ場を盛り上げていたに違いない。「夏終る」に達成感があふれている。

体育の日の翌日が誕生日そんな言い方出来た昭和よ　奈良市　西本　匠

【評】「体育の日」は十月十日と決まっていたが、今は「スポーツの日」となり、日が変わることも。十一日生まれの困惑が伝わる。

五時に出で七時の大阪九時半にハウステンボス八十歳の旅　綾部市　松下二三夫

運転を夫に頼りし暮らしにも脆さ有りしと思う黄昏　匝瑳市　伊藤　英子

生かされており面倒とは禁句なり胸の鼓動に手を当て感謝　仙台市　岩渕　吉喜

斉藤家黄のコスモスで小川家はオレンジコスモス混じりけ無しで　東京都　大村　森美

見守るは何もせぬこと行く船にとって父とは寒き灯台　川越市　太田　二郎

今日もまた懲りずに喧嘩の老夫婦ともに願うは世界の平和　東京都　伊藤　直司

物思いため息一つ見上げれば雲の図鑑となれる秋空　大阪市　鷹取　真子

俵　万智　選

つぎつぎと書類のように葉が積もる忙しそうな秋の職場で　越谷市　あきやま

【評】書類が木の葉のように降り積もる職場ではない。書類のように木の葉が積もっている。なにか人間以外の生き物の職場を想像させられて、世界が一気にメルヘンチックに見えてくるところが魅力だ。

古新聞地層をなして重なればひと月前のニュースは化石　東京都　武藤　義哉

【評】新聞や雑誌を地層に見立てるのは珍しくないが、もう一歩踏み込んで、そこに化石を見出したところがいい。ニュースが古びる速さを感じさせられる一首でもある。

山の端の代はりに集合住宅の五階辺りにいでし月かも　横浜市　佐藤　隆司

【評】現代的な月の光景を、あえて古典的な詠嘆を用いて詠んだところが面白い。

ずれていることすら気持ちいい夜の部分転調みたいなぼくら　富山市　山岸　ゆき

戦えば敵となるガンなだめつつジャスミンティーの香りを蒸らす　豊中市　今西　幹子

木々は皆思い思いの動きする秋の初めの風に吹かれて　生駒市　宮田　修

やり直しやり直せればやり直そう文法みたいに私のこころ　守口市　小杉なんぎん

文末の種を成長させる恋　絵文字疑問符感嘆符咲く　高崎市　杉橋　慶風

どら猫の「どら」って何？と思うけどスマートフォンで調べずにおく　横浜市　富尾　大地

「松」「桜」愛した木の名それぞれを刻むふたりの位牌揃ひぬ　鹿沼市　鈴木佳代子

黒瀬　珂瀾　選

おできでしょうかわたしはでんきですキルギスからの秋の絵葉書　京都市　根来美知代

【評】遠く海彼の友人から届いたハガキ。どうやら、「げ」と「で」を取り違えているのだろう。でも、一生懸命に日本語を書いてくれた、その心使いが嬉しいのです。

願わくばあと十年は付き合えと築五十年に手摺を付ける　真庭市　小谷　義孝

【評】ともに年老いた自分と自宅。五十年もの間、お疲れ様。でもあと十年はよろしく、というユニークな連帯感が詩になった。

唇の下に犬歯を隠しつつ小鳥のやうな口付けをせよ　相模原市　高田　祥聖

【評】表の表情と裏の心。いざとなれば相手を噛み切る犬歯を隠しつつ、いまは愛らしい接吻をかわす。むしろこれが、恋愛の駆け引きというものかもしれません。

サクサクと梨の甘露の滴りは水脈となり吾を満たしゆく　黒部市　新酒　律子

吾が庭に初めて出会ふ赤蜻蛉後期高齢者とて未来あり　坂戸市　納谷香代子

六法は口語と成るも心して文語の良さを短歌に込めむ　常総市　渡辺　守

親殺し子殺しのたび腹を立てニュース見ている座して見ている　船橋市　花沢冨美雄

白露の日さらしに麻の単衣着せ送りし日より忌日巡り来　香芝市　中村　翠孝

廃線の通る人無き大通りバス停の名は今も「駅前」　徳島市　糠塚　守

彼岸なる師にも見ゆるや彼岸花赤よりも白を愛でたまひにき　西条市　山本美知子

◇投稿規定◇　はがき１枚に未発表の１作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇毎週月曜日に掲載　右の影絵はきんもくせい